

本年度の研究について

1 研究主題

一人一人が意欲的に取り組める算数科学習
～だれもが「わかる」「できる」「たのしい」授業づくりを目指して～

2 主題設定の理由

(1) 学校教育目標から

本校では、「～生涯にわたって学び続ける子どもの育成～ かしこく すこやかに 」を目指し、以下のような児童像を掲げている。

- ・**に**こにこあいさつ やさしい子ども
- ・**い**つも健康 元気な子ども
- ・**は**たらく汗が 輝く子ども
- ・**ま**なび合い 教え合う子ども

これは、知・徳・体の調和のとれた豊かでたくましく人間性を培うとともに、新しい時代の変化に主体的に対応できる児童の育成を目指している。そのためには、確かな学力を身に付け、自信をもち、一人一人が主体的に学習に取り組めるようにすることが大切である。

(2) 児童の実態から

どの学年も学力の差が大きく、基本が十分定着していない。また、数学的な思考力・応用力が十分身に付いていないため、学習したことを活かして問題を解くことができていなかったり、問題解決の際に自分の考えをうまく表現できなかったりしている。このことが、算数科学習に対する意欲の継続を妨げていると考えられる。

これらの実態から、「一人一人が意欲的に取り組める算数科学習～だれもが「わかる」「できる」「たのしい」授業づくり～」を目指すために、指導過程（単元の導入や教材・教具、意欲を継続することなど）を工夫して、興味関心を高めることや数学的活動を効果的に取り入れ、個への支援を充実していくことが大切であると考えます。そうすることで、児童が「わかった!」「できた!」「たのしい!」と実感し、算数科学習に意欲的に取り組むことができると考えた。

3 研究仮説

《仮説1》

児童の実態に応じた**数学的活動**を効果的に取り入れれば、基礎基本が身に付き、よくわかり、できる喜びや楽しさを味わわせることができるだろう。

～研究1年目の反省～

◎作業的・体験的な活動、具体物を用いたりする活動を効果的に取り入れることで、一定の成果が見られた。

- 既習を使って自ら解決しようとする力が身についていない。
- 説明手段（ツール）が身についていない。

～研究 2 年目の反省～

- ◎ 掲示物を提示したことで、既習を確認し、活かしながら自分で答えを求められた。
- ◎ 問題の文脈を絵・図・表に表す活動を取り入れたことで、日常的に活用する習慣が少しずつ身についた。
- ◎ 教材の工夫として、図形シートや絵図を使うことで、考えることや求めることを視覚的に理解できた。また、説明をするためのツールになった。



< 研究 3 年目 >

今までやってきたこと（研究 1、2 年目）を深めたり、数学的活動を取り入れたりする。

- 児童の実態やねらいに応じた教材・教具の工夫
- 作業的・体験的な活動
- 具体物を操作する活動
- 算数に関する課題について考えたり、算数の知識をもとに発展的・応用的に考えたりする活動
- 考えたことなどを表現したり、説明したりする活動
- 問題を自主的、協働的に解決する過程を遂行できるような手立て・取組（今年度追加項目）

《 仮説 2 》

個に応じた支援の仕方や学習形態の工夫を図れば、よくわかり、できる喜びや楽しさを味わわせることができるだろう。

～研究 1 年目の反省～

- ◎ グループ活動による学習形態の工夫としてペアトークを行い、友だち同士で考えたり、確認したりしたことで意欲的に活動できた。
- ◎ 個に応じた支援の工夫として、難易度を変えたワークシートの活用したことでつまずきが減った。

～研究 2 年目の反省～

- 意識調査の結果から、全体的に大きな変容は見られなかったが、否定的（「あまり」「いいえ」）な児童が減少し、肯定的（「はい」「だいたい」）な児童が増加した。しかし、「自分からすすんで問題を解きたいと思います」「新しい問題を解くときに、前に習った学習を使って解こうとしています」では、「はい」と答えた児童が減少した。これらのことから、否定的な児童へのアプローチは効果があったが、肯定的で上位の児童へのアプローチに課題がある。
- また、意識調査の「自分の考えをグループやクラスのみんなにすすんで伝えることができます。」の項目は、他の項目と比べて、約 20% 低かった。



<研究3年目>

今までやってきたこと（研究1、2年目）を深め、自分の考えを進んで伝えられるような手立てを考える。

○ねらいをもったペア学習（ペアトークなど）・グループ学習

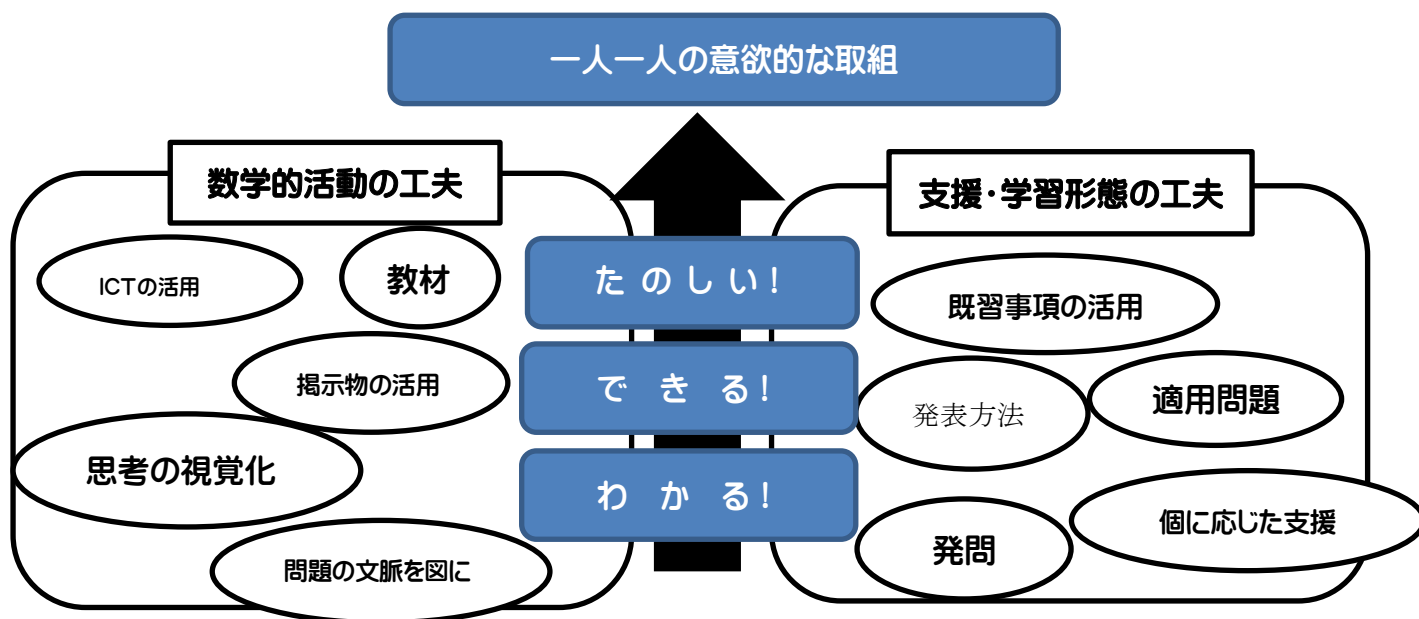
○個に応じた支援

○発表方法の工夫

○肯定的な児童に対してのアプローチ（今年度追加した項目）

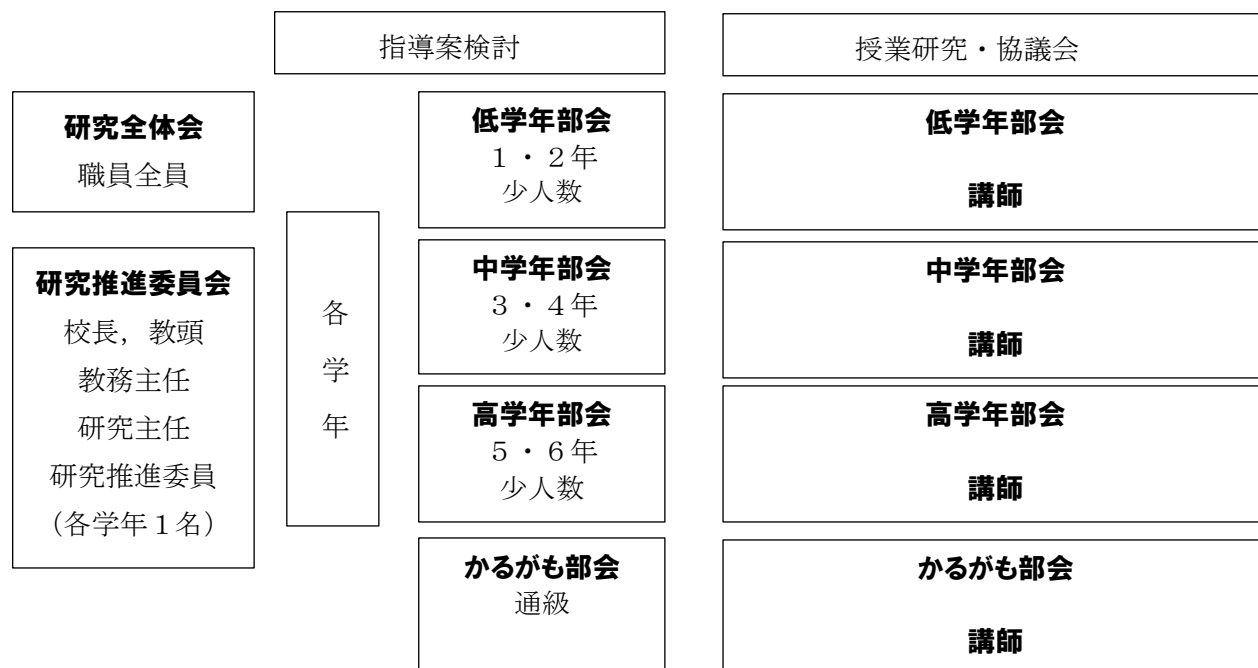
○自分の考えを友だちやクラスの人々にすすんで伝えることができるような手立て（必要感）

<研究仮説に対してのアプローチ図>



4 研究体制

<今年度>



5 研究の取組について

《研究日》

- 各学年や部会で指導案検討・教材づくりの時間として扱う。
- 研究推進委員会を行う。(不定期)

《指導案の形式》

- 昨年度と同様の雛形を使用する。
- ※単元観，児童の実態に学校教育目標「かしこく」を関連して記述する。
- ※本時の指導（展開）に仮説番号を入れる。

《指導案検討》

- 1回目は学年検討，2回目は部会検討とする。部会検討後，講師の指導を受ける。
- 部会検討，講師との事前指導の調整は各学年の研究推進委員が行う。
- 完成した指導案は10日前までに池上まで提出し，郵送は池上が行う。
- 指導案作成，授業の準備などは学年で協力して行う。

《授業について》

- 一人一授業を行う。
- 講師を招いての授業は学年2名。その後，協議会を行う。部会内で参観する。
- それ以外の先生は学年内で授業参観（事前・事後など）し合い，学びの場とする。

《授業研究の時期について》

- （前期）2，4，6年生（後期）1，3，5年生，かるがも学級

《児童の変容を示す方法について》

- 全学年共通の意識調査を行う。（4月，12月ごろ）

6 年間計画

4月	○研究推進委員会（今年度の研究の進め方について） （指導案・意識調査項目等検討・決定） ○研究全体会（4/20）（今年度の研究について）
5月	○各学年 研究希望提出期限日（4/27） その後，講師の依頼・日程調整
前期 6～9月	○2，4，6年生 研究授業
後期 10月～12月	○1，3，5年生，かるがも学級 研究授業
1月	○今年度の反省・紀要のまとめ 締切日（1/11） ○研究推進委員会（1月中旬） 今年度の反省・紀要・来年度について ○研究紀要の綴じ込み（1/30）
2月	○研究全体会（2/4） <u>各学年から1年間の学習の成果・課題を報告（手立てなど）</u> 講師の先生からのご指導 ○研究推進委員会（次年度への見通し） 研究の方向性について話し合い